

Enzo Mari e diecimila milioni di alberi di sugi

エンツォ・マーリが取り組む100万の1万倍もの日本の杉の木
ENZO MARI AND TEN-THOUSAND MILLION SUGI TREES

「エンツォ・マーリが取り組む 100 万の 1 万倍もの日本の杉の木」

展覧会場：トリエンナーレ（ミラノ市内）

開催期間：2005 年 4 月 13 日－19 日

会場構成：エンツォ・マーリ

照明：ピエロ・カスティリオーニ

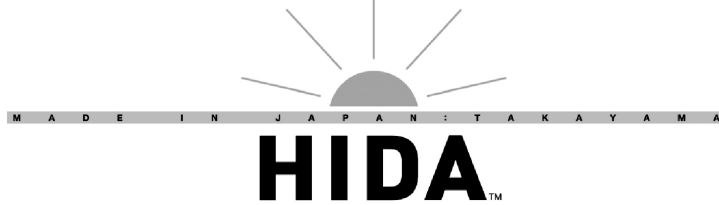
プレス・リリース

この度のミラノ・サローネ国際家具見本市（2005 年 4 月 13 日～19 日）開催にあたり、トリエンナーレに設営される『エンツォ・マーリが取り組む 100 万の 1 万倍もの日本の杉の木』展は、このイタリア・デザイン界の巨匠と日本の木製家具メーカー、飛騨産業との出会いとコラボレーションの物語である。

エンツォ・マーリは、いまやマーケティング論理の呪縛から解放されず、標準化の流れに否応なく付き従うような生産システムに対抗して、自らの「叫び声」をあげることを諦めず、デザインというものをプロジェクトの総合的なクオリティーとして取り上げる緊急性を執拗なまでに訴え続ける。マーリが 1999 年のバルセロナ宣言で表明しているように、「作業を中心に据えること」が常に第一優先であり、何故ならば、フォルムそのものの存在意義に「フォルムを生み出す作業」が当然のごとく含まれているからで、故に、フォルムを「工業製品にエレガンスを与える記号」としてのみ解釈することはできないのである。

このような前提となる思想を全面的に共有できたことが、マーリと飛騨産業のコラボレーション誕生の糸口となった。2003 年 9 月、岐阜県の地場産業活性化を目指す県機関「オリベ想創塾」の招聘企画として、エンツォ・マーリの一連の講演会が高山市で開催された。当時、マーリは地元の家具メーカー数社を訪問したが、飛騨産業はその中の一社だった。社長の岡田賛三は、マーリの独自のデザイン哲学や日本の美への深い造詣を通して彼の個性に深く共鳴し、飛騨産業が世界に向けて発信できるような、杉材を用いた家具製作共同プロジェクトの提案をマーリに持ち掛けたのである。

杉は日本固有の針葉樹である。第二次世界大戦後、戦禍により荒廃した地域に迅速に植林する必要性に迫られ、政府は大規模な杉の植林事業を行った。実際、杉は家具製造に特に適した木材というわけではなく、むしろ材質が非常に柔らかく節の目立つことが特徴である。



Enzo Mari e diecimila milioni di alberi di sugi

エンゾ・マーリが取り組む100万の1万倍もの日本の杉の木

ENZO MARI AND TEN-THOUSAND MILLION SUGI TREES

しかしながら現在、杉はあまりにも数が増えすぎて、日本の森林にとって深刻な問題となっており、家具に杉を使用することで数を減らすことができれば、それは非常に望ましいことなのである。

このような環境保護への積極的な関心に加え、杉材を使った家具製造は必ずや原料コストの削減に繋がることも明らかである。ムク材の加工技術は、飛躍的な進歩を遂げたとはいえ、今日もなお古くから受け継がれる職人の知恵に頼るところが大きく、質の高い専門性を持った労働力を必要としている。賃金や労働環境以外の面において生産コストの削減を図る努力は、無論、製品の競争力を追求する意志の表明であるが、その競争力は必ずしもフォルムの質および社会的価値の喪失を引き起こすような競争力ではない。エンゾ・マーリが繰り返し主張するように「今日、人間自身を配慮したこのようなエコロジーは、森林へのエコロジーに勝るとも劣らない重要性を持つ」のだから。

杉が極端に柔らかいという弱点は、岡田賛三と飛騨産業の技術スタッフによって克服された。日本の大学研究機関の貢献もあり、ブナ材と同レベルの弾性を得られるような、木材繊維の特殊な圧縮方法を確立したのである。

節に関しては、岡田とマーリの確信は最初から揺るがなかった。節は杉に備わる自然の特徴なのだから、そのままの姿が尊重されるべきであると。さらにこう付け加えられる。消費社会の批判にひっきりなしに追い立てられる近年の西洋産業界が、労働者の権利尊重や、環境保護を考慮した生産規定の導入などの美徳行為を立証するために競って「証明書」をひけらかすことを覚えたことは、恐らく間違いなのではないだろうか？ 杉を活かすことが人々の生活にとって倫理的に正しいアクションであるならば、この杉に備わる「節」にこそ真正銘の「選り抜きのブランド」に値する価値があるのではないだろうか？

本展覧会に出品されている初公開の 20 余りのプロトタイプの準備には、1 年半の歳月が費やされた。この期間、マーリは飛騨産業のデザイン室長や作業グループとたゆみない討議を重ねながら、自らのプロジェクト・ヴィジョンを発展させ、彼にとっては久しぶりの「共同作業」という次元の中で仕事を行うことができた。イタリアの産業界において「共同作業」という文化が完全に取り除かれ、もはや実行不可能であることに対して、マーリは時に辛辣な口調で不満を洩らす。

ミラノ・サローネ開催期間、トリエンナーレの本展覧会を訪れる来場者は、椅子やテーブル、ソファなどの展示家具と自分自身の間に「或るひとつの関係」を構築する手法、しかも、今までとは違う新しい手法を見てとる特権に恵まれるに違いない。そしてここでは、ナルシスティックな創造性という独善的な自己表現の類に耽溺することは決してない。



Enzo Mari e diecimila milioni di alberi di sugi

エンツォ・マーリが取り組む100万の1万倍もの日本の杉の木

ENZO MARI AND TEN-THOUSAND MILLION SUGI TREES

『エンツォ・マーリが取り組む 100 万の 1 万倍もの日本の杉の木』展の叙事詩的スケールは、来場者の共感を誘い出し、「ユートピア」という言葉を高らかに謳う勇気を鼓舞する。そして、新たな道筋の可能性を指し示す矢印のように、少なくとも「ユートピア」の兆しや片鱗を内包しているようなプロジェクトの必要性を力説する。

エンツォ・マーリの目に映っているのは、「欲しくなるように仕向けられたもの」と「ほんとうに欲しいもの」を見分ける批判精神や手段をあまりにも従順に失ってしまったような集団性である。本展覧会を通して、マーリはそんな集団性に対し力強く異議を唱え、警告を発するのだ。

デザインの思想家、エンツォ・マーリは、今回もまた、背筋を伸ばして徹底的に意志表明することを恐れない。彼は自身の仕事を通して、「消費サイボーグ」になりかねない我々の中に、自分自身の夢を見たいという欲望を抱かせてくれる。夢の中には時に悪夢が忍びよるリスクもあるだろう。しかし、無限にクローン化できる「テクノ・スーパー・マリオネット」をいつでも作り出すような、独り善がり的人工的で画一的な幸福の単調さに比べれば、そんな悪夢がいったい何の支障を来たそうか？